

町史だより

(30)

小須戸の園芸

(一)

今は昔・梨栽培の隆盛

日本梨栽培の記録は、すでに「日本書紀」に見られ、新潟県は梨栽培の北限でありながら、わが国のうちでも古い栽培歴史をもっている。天明二年東實場村(現白根市)の阿部源太夫がのこした同家秘伝「梨榮造育秘鑑」稀本にすでに九十九品種の梨を記入しているところからも、毎年水害に悩まされながらも、その地質が梨栽培に適した信濃川流域一帯は、昔からすでに梨栽培がさかんであった。

小須戸地内に於いても、安政年中、鶴出古木の佐藤権六及び庵支新田の渡辺惣左衛門が前記の阿部家から梨栽培の方法を伝習したが、そのはじまりであるという。

明治四十四年刊「新潟県園芸要鑑」によれば、今年頃の須戸地内の梨栽培の区域は大字新保・竜玄・小須戸の字で、作付反別二町三反歩(内成木反別十四町六反)、成木本数一七、九八五本、未成木本数四、一八六本、産額五四、六四一貫、価格四、六一

四町と記録され、意外な隆盛がうかがわれる。

品種は、はじめは晩赤龍であったが、黒星病の蔓延により不作となり、土佐城・太古賀に移ったが、これも明治十六・七年頃病害蔓延、早生赤龍、晩三吉に移り、この兩種も病害に犯され強剛種の養老に移った。明治末期にようやく黒星病の完全予防法が発見され、病虫害との闘いの末ようやく、早生赤・太白・長十郎の新品種に定着した。当時の著名な栽培家は、長沢善平・五十嵐兵治・佐藤権平・岡田吉治等と記録されている。

果樹・苗木栽培の変遷

明治四十一年、当時の梨栽培者が中心となり、「小須戸町果樹栽培組合」を結成、組合員は三十八名、組合長高山藤三郎、副組合長岡田長吉であった。一方、明治四十三年に「小須戸町苗木販売組合」も結成され、当初の組合員十三名、理事長佐藤熊治・理事佐藤虎松・佐藤市平・高橋万之助の諸氏であった。

大正初年に至ると、人間の趣向の変わり方、養蚕業の奨励花卉・盆栽業の進展等によって、小須戸地内の果樹・苗木栽培に大きな変動が生じた。

大正五年の「小須戸町是」の記録によると、畑・園地作付面積は桑園をなごさる反別を合じ、は、梨五町一反、桃九反九畝、葡萄一反九畝、柿廿二町八反、柿洪一町九反ととなっている。桑栽培面積は鶴出古木田中家の桑苗の植栽奨励等により梨栽培を圧倒、一時は果樹園を離して桑樹の作付に転ずる者もあり、信濃川堤外地も含め広大な桑栽培地ももった。なおとくに注目されることは梨栽培が衰退してそれに代って柿栽培が増す兆が現われつつあることである。

これがやがて次の新保柿に連つていく。

一方園芸業の進展もあって桑を含めた果樹・庭木の苗木生産者も増し、大正五年当時産業者も約六〇戸となり、生産産数量リンゴ五万本、梨三万本、桃・すもも各一万本と、梨に代って、リンゴ・すももの苗木需要へ移っていった。

新保柿生産の経過

大正期、新保部落の先覚の者で、すでに、すもも・あんず・リンゴに意欲を燃やしていた人もおったが、とくに着

目されたのは波柿の早生寺社柿である。当時川瀬忠作氏と丸山虎次氏宅の屋敷内に早生寺社の原木ではないかと称せられる古木もあり、大正初期頃から、新潟の「笹屋」その他五、六人の商人が入って部落の柿を買い集めていた。最初は畑買いで、入夫を連れて来て摘み取り、商人が小須戸の渡場から船で新潟へ運んだ。その後、生産者が各自で、商人衆の宿であり集荷場である県道沿いの「ささらや」へ持っていく様子で目方を量られた。その秤り方がひどい悪質になっていくので与論沸騰、大正十年「小須戸町早生寺社柿出荷組合」を結成、三十歳を過ぎたばかりの養和清之十が会長になり、組合の力で、生産・出荷を取り捌いた。とくに高山秀太郎が一反歩の畑に早生寺社の苗木を生産してから、急激に増殖、昭和十年頃は生産量八万貫、十頃車三十三車に積んで北海道へ発送したこともある。組合は花火を揚げて豊作を祝い新保柿の名は世に広まった。

脱澱法は最初湯さわし法であったが、昭和の初め町の農業技術員吉村真津雄の斡旋で県試験場長高橋技師を招いて炭酸ガス脱澱法の指導を受けた。写真の如く旧公会堂裏組合作業場に直径六尺の木桶を設け科学的な脱澱を行なっ



炭酸ガス脱澱装置

左より高橋技師、吉村技師、養和清之十、高山清松、高山秀太郎氏